

驚くべきことである。

また、将来的にはアートフラワーのみに止まらず、手芸作品や七宝焼の作業にも関心を示し、作業の幅を広げつつある。彼等の作業が単に講座の延長として行なわれるのではなく、創造性をもった作品が彼等の手によって作られるようになるよう指導していきたいと考えている。

12、Duchenne 型 PMD 患者の tracing 作業負荷による心拍数変化

国立療養所鈴鹿病院

宮崎 光 弘 片山 幾 代
野尻 久 雄 河野 慶 三

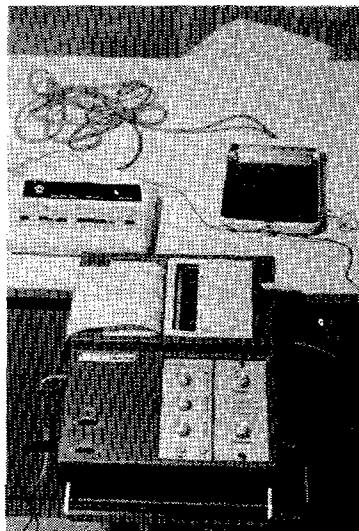
Duchenne 型 PMD 患者の行動特性については種々の方法を用いて検討をすすめてきた。今回は人為的に設定された緊張場面における PMD 患者の身体反応を指標としてその特性を検討した。

〔対象と方法〕

対象は当院に入院中の Duchenne 型 PMD 男子 25 例（9 - 21 歳）である。

図 1 に示した鏡映描写装置の星型図形板を使用し星型図形板を trace させ、描写経過および心拍数を心電計を用いて同時記録した。試行前の心拍数を 1 分間記録し、その後「この星の図形をペンでなぞってください。ペンは溝からはみださないように、浮かさないようにして、できるだけ早く、多く回ってください。“ハイ”の合図から“ヤメ”の合図までです」と指示した。作業の 1 試行時間は 1 分間とし、1 分間の休憩をはさんで 10 回くり返した。

(図 1)



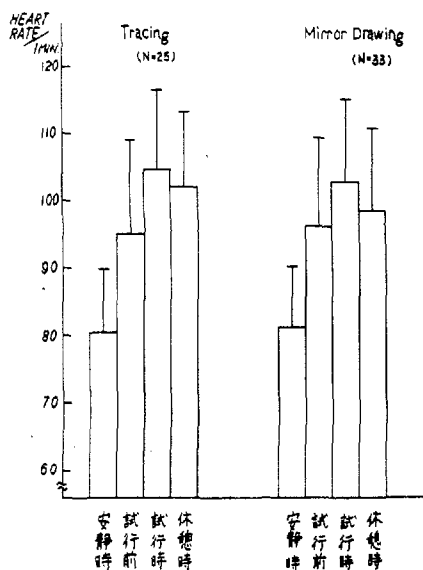
〔結 果〕

図2に安静時、試行前、試行時、休憩時の心拍数平均とその標準偏差を示した。安静時心拍数とは、検査前に安静状態で radial artery の触診により測定した脈拍数のことである。さらに図2には前回報告した鏡映描写の心拍数変化の結果も比較のためにあわせて示してある。

tracing 作業でも、試行時の心拍数がもっとも高くなっていた。試行前に彼らの心拍数が有意に増加したことは鏡映描写と同じであったが、試行時と休憩時の間には有意な差はなかった。

PMD患者の心拍数の継時的変化を観察すると、図3に示した4つのパターンに大別された。Mean は全対象者の同一試行回数ごとの平均値の変化を示したもので、試行にともなう変化が全体としてはみられないことがわかる。症例E・Gは試行にともなう変化があまりみられない点は平均値の動きと類似しているが、試行時の心拍数が休憩時のそれに比し明らかに多いことが異なっている。症例K・Iの型を示すものは25例中3例にすぎないが、試行時より休憩時に心拍数が多い点に特徴がある。症例N・Gの型は25例中2例であったが、試行にともない心拍数が増加し他の3型に比べ試行時と休憩時の心拍数の関係が一定していないのが特徴である。

(図2) 心拍数平均値の比較



(図3) 心拍数の推移

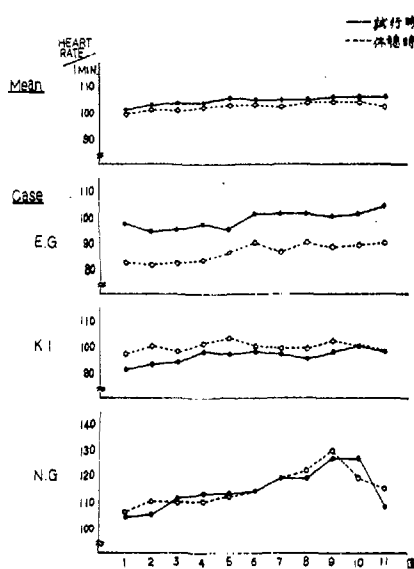
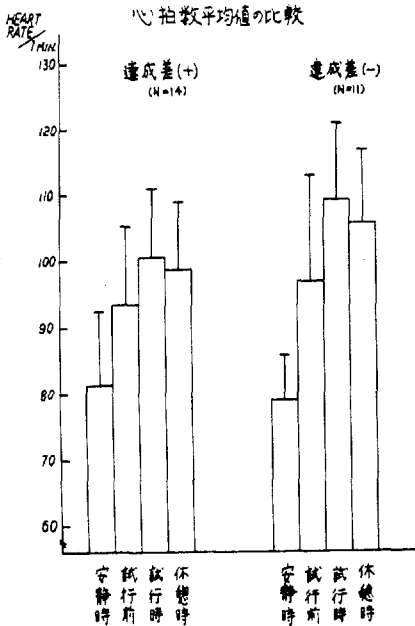


図4には同時に行なわれた要求水準検査法達成差で層別した心拍数平均値の比較を示した。(+)群、(-)群、ともに休憩時に比し試行時に心拍数の増加がみられるが、試行時心拍数平均は(+群) 100.6 ± 10.5、(-)群 109.5 ± 11.6 と(-)群が有意に高かった。また休憩時心拍数平均も(-)群が明らかに高くなっていた。

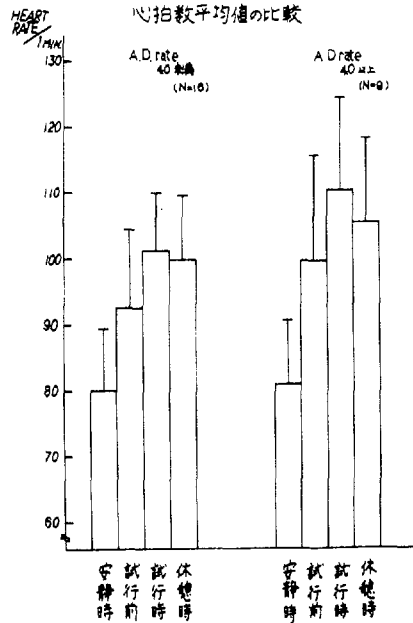
さらに図5にA・D rate (達成変動率)で層別した心拍数平均値を比較して示した。両群ともに休憩時に比し試行時に心拍数が増加しており、試行時心拍数平均はA・D rate 4.0未満群

101.2 ± 8.8、A・D rate 4.0 以上群 110.4 ± 14.1 と A・D rate 4.0 以上群が有意に高くなっていた。安静時心拍数平均は両群ほぼ同じ値を示しているが、試行前、休憩時心拍数平均で A・D rate 4.0 以上群が高くなっていた。

(図 4)



(図 5)



[考 察]

これらの結果をまとめると、

- ① 前回の鏡映描写負荷に比べ作業による心理的ストレスは軽減されていると考えられるにもかかわらず、tracing 作業負荷による心拍数の変化は、ほぼ鏡映描写負荷の場合と同様である。
- ② 設定した目標を達成していない群(達成差(-)群)のほうが達成した群(達成差(+))群)に比し試行時の心拍数が有意に多い。また、目標達成の不確実な群(A・D rate 4.0 以上)のほうが、確実な群(A・D rate 4.0未満)に比し心拍数が有意に多い。
- ③ 試行時に比し休憩時の心拍数が多い特殊な反応型を示す例が今回も3例みられた。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

Duchenne 型 PMD 患者の行動特性については種々の方法を用いて検討をすすめてきた。今回は人為的に設定された緊張場面における PMD 患者の身体反応を指標としてその特性を検討した。